

日米欧委員会第十回東京総会におけるスピーチ

(昭和五十四年四月二十四日 総理官邸)

日米欧委員会第十回東京総会の皆さまにお会いできるのは、私の大きな喜びであります。

皆さまの多くは顔馴染みの方々に、私もくつろいだ感じしております。皆さま方の中には、きっと、昨年末、私が首相に選ばれたことでびっくりされた方がいらっしやるに違いありません。実は、私自身予想外でした。いずれにせよ、皆さま方が今後とも変わらず友情と助言と激励を与えて下さるようお願いいたします。

まず、本委員会がさらに三年間活動を続けることとなったことは、ご同慶のいたりであります。本委員会は、年を追ってその重要性を増し、プレスステージを高めております。次の三年間の活動が、さらに一層有意義であることを期待する次第であります。

この機会に一九八〇年代に向かっての内外にわたるわが国の針路につき、私の考え方の一端を申し述べたいと思います。

今日、いかなる国も国際社会から隔絶しては生存し得ないことは言うまでもありませんが、特にわが国は、国際協調の中にしかその生きる道を見出し得ないのであります。わが国の経済は、いまや自由世界二

位の規模にまで成長いたしました。例えば、エネルギーの七五パーセントを海外に依存せざるをえないこと一つを取り上げてみても、日本が世界とともにしか生きていけないことは明らかであります。

他方、世界経済に占めるわが国の比重が著しく高まったことに伴ない、わが国の国際的責任もそれだけ高まったことは言うまでもありません。今後のわが国の針路は、このようなわが国の国際社会に対する依存関係を従来にも増して強く認識すると同時に、わが国の経済力とその国際政治に占める地位にふさわしい責任と役割を、より積極的に果たしていくことに求められなければなりません。

もとより、相互依存の認識と責任の自覚は、ひとりわが国のみに限ったことではありません。世界経済に等しく大きな比重を占める米欧が、一時の不満のはけ口を安易な保護主義の方向に求めるようなことがあるならば、世界全体を大きな混乱と不幸におとし入れかねない点は銘記されるべきであると考えます。

ひるがえってわが国内に眼を向ければ、わが国は、戦後三十余年、経済的豊かさを求めてわき目もふらず邁進し、顕著な成果をおさめてまいりました。しかし、これからは自然と人間との調和、自由と責任の均衡、深く精神の内面に根ざした生きがい等に一層配慮していかなければなりません。

いまや経済的豊かさのみを追求する時代から脱脚し、文化的な豊かさ、人間性の尊重を目指す時代に至ったと見るべきであります。かかる認識に立って、私は、文化の重視、人間性の回復を目指して、家庭基盤の充実、田園都市構想の推進等を通じて、公正で品格のある日本的な福祉社会の建設に努めたいと考えております。余暇についても、より充実したものとなることが望ましく、とりあえず週休二日制を一般化するようになりたいと思っております。

対外面でのホット・イシューは、申すまでもなく日米・日欧間の経済摩擦をいかにして調整するかの問題であります。

わが国貿易の四分の一の相手国たる米国に対しては勿論のこと、私は、西欧、特に世界最大の貿易ブロックを形成している欧州共同体との間の経済摩擦についても、その厳しさをなんら過小評価するものではありません。

経済摩擦の調整については、わが国は、単に短期的のみならず、長期的展望に立つて対策を講じなければならぬものと考えております。具体的には、わが国内市場の一層の開放を図る一方、わが国の経済が国際経済の重要な一環をなしているとの自覚に立つて、世界経済の調和的發展に積極的に貢献しうるような形でわが国経済の仕組を考え、その運営を図っていくことに努めなければなりません。

以上のような内外の施策を講ずるにあたり、私は、日本独自の良き伝統を維持しつつも、他方、わが国と欧米とが共によって立つ共通の基盤を一層強固なものとするよう努めてまいりる所存であります。

各個人が個性を有するように、各国にはおのおのの伝統、生き方、行動様式があります。欧と米との間に違いがあり、かつ欧州諸国それぞれの間にも相違があるのと同様、日本と欧米との間には、歴史的背景、地理的環境に由来するさまざまな相違があることはいわば当然であります。

このようなわが国の文化面、社会面での独自性が、往々にしてわが国のイメージを不当に歪め、かつ相互の意思疎通を難かしくしているようにも思われます。

しかし、他方において、日本は高度工業化社会として、多くの点で米国及び西欧諸国と共通点を有して

おります。わが国が一世紀前、近代化の道を歩み始めた折、範としたのは、西欧諸国でありました。

わが国は、個人の自由と尊厳の確保を目標とし、議会制民主主義の政治体制を信奉し、かつ市場経済、自由貿易の原則にしたがう等の点において、欧米と基本的な価値観とアスピレーションを同じくするものであります。また、高度工業化社会として欧米と同じ問題に直面し、同じ困難に悩んでいる国であります。主要国首脳会議において、日米欧が、成長、エネルギー、通貨など経済面における共通関心事と共通の責任について協議している所以も、そこにあります。

私は、わが国が欧米と文化、社会的背景は異にするものの、同じアスピレーションを有し、同じ道を歩んでいるということが、よりよく欧米で理解されるよう訴えたいと思います。

かかる観点から、私は、日米欧の関係者の間で、一つには、社会や文化の異なる国の中で、国際的摩擦や誤解がいかんにして生じ、どうすればその防止や除去が可能であるかにつき、いま一つには、犯罪の増加、都市の過密化、農村や僻地の遅れ、労働モラルの低下、人間的連帯の弛緩といったような、高度工業化社会に特有な問題につき、共同研究体制を発足させることが、きわめて有意義であるうと考える次第であります。

前述のとおり、日本と欧米とは、それぞれが独自性を保持しつつも、ともに先進工業化社会として共通の基盤の上に立っております。この事實は、日米、日欧、またさらに日米欧の間に創造的な相互依存関係と、それにもまして有意義な協力の関係の確立を可能ならしめるものであります。日米欧は、単に先進工業国家間の問題にとどまらず、広く南北問題、東西関係などに、共通のアプローチでのぞむことが可能で

あり、このような協力関係は、世界の平和と人類の繁栄に大きく貢献するでありましょう。

フランスの著名な飛行士で作家のサンテグジュペリは、「愛し合うということはお互いを見つめることではなく、共に同じ方向を見つめることである」と述べた由であります。もしわれわれ日米欧が、互いに手を携えて、自分達相互の諸問題のみならず、広く世界の諸問題に取り組んでいくことができれば、また、それこそがわれわれの共通の使命であります。そこに日米欧の間の真の友情がつかわれ、また人類の未来が開かれるものと確信いたします。

(参考) このスピーチは、東京総会参加者のための総理官邸での午餐会において英語で行われた。

これは、日米欧の協力関係促進の意義を強調したもので、その大平総理の意が英語で直接に参加者に伝達され、終了後、一同起立拍手をもって賛辞を表した。